

シンポジウム 1

「食道アカラシアに対する内視鏡治療の課題と展望」

司会 井上 晴洋（昭和大学江東豊洲病院消化器センター）

塩飽 洋生（福岡大学医学部消化器外科）

食道アカラシアは、下部食道括約部の弛緩不全と食道体部の蠕動運動の障害を認める食道運動機能障害である。主な治療法として、バルーン拡張術、腹腔鏡手術（Heller-Dor 手術）、経口内視鏡的筋層切開術（POEM）がある。バルーン拡張術は、多くの医療機関で行うことができ、また患者に対する侵襲が低いという利点がある一方で、1回の治療による効果が限られるため、繰り返し治療を行うことが前提となる。一方、Heller-Dor 手術や POEM は、単回の治療で、恒久的かつ高い効果を期待できる。POEM は本邦で開発され、2008 年に世界第一例が施行された。体表に傷をつけることなく、内視鏡的に食道の内腔から筋層切開を行うものである。有効性、恒久性、低侵襲性、整容性においてバランスのとれた治療法であるため、患者の受け入れも良いことから、国内外において標準治療となってきた。本セッションでは、食道アカラシアの診療を行う際に、各施設において直面した残された課題や、今後の展望などについて広く公募をし、議論を深めたい。